

研究ノート

キエルケゴールの教会批判における敬虔主義の意義

—— シュペナーとの比較から ——

藤 枝 真

序

仮名と本名を使い分けることで自己と著作との巧みな異化を図ったことが知られているキエルケゴールであるが、後世の数多のキエルケゴール研究を閲すれば、キエルケゴールの諸著作とその思想的背景となった彼自身の人生とを直接に関連づけて論じる向きが多いことが分かる。このような傾向は、キエルケゴールの著作活動が常に彼の人生の諸契機と共に大きく変貌し深化していったことに拠るものである。キエルケゴール哲学の最大の特徴は、彼の人生や社会情勢と著作活動との不可分な相互作用にあると言って

もよいだろう。誤解を恐れずに言うならば、キエルケゴールの哲学は私小説ならぬ「私哲学」であって、事実、キエルケゴールの関係した歴史的出来事や人物についての知識が、キエルケゴール哲学の理解の助けとなることも多々ある。

このようなキエルケゴール及びキエルケゴール研究を取り巻く状況下にあつて夙に知られてきたのが、著作活動の後期における徹底的な教会批判である。キエルケゴールは当時のデンマーク国教会からは教会を荒らす者として認識されていた。もちろんキエルケゴールの批判はキリスト教そのものに向けられたのではなく、形骸化した制度としてのキリスト教会に向けられていた。このような教会批判の

態度は何もキエルケゴールが初めて表したのではなく、特にプロテスタントに限って見ても、この類の動きの原型を過去にもとめることは容易である。17世紀終り頃ドイツに現れた敬虔主義もそのようなものの内の一つだといえる。端的に言うならば、このような教会批判という行為の目指すところは、制度化して宗教的情熱が感じられられなくなった教会に対する内部告発、つまり新たな信仰覚醒の運動である。

敬虔主義という言葉だけ聞くなれば、キエルケゴールの思想との齟齬無き一致を短絡的に連想しても当然に思えるが、著作や日誌・遺稿における扱い方を見るならば、両者は密ながらも留保付きの位置関係をとっていたことが読み取られるのである。

この論考では、先に述べた著作と思想的背景との関連に着目した研究方法を採ることで、キエルケゴールの教会批判を、敬虔主義という言葉のもつ多義性を比較検討しつつ読み解いていく。

1. キエルケゴールと敬虔主義の邂逅

「私は、感謝にみちた追憶をこめて、すべてのことについ

て、とくにまた私の仕事についてもっとも多くのものを負っている人である私の亡くなった父のことを記念したい」¹。先に述べたキエルケゴール研究の姿勢をとるとき、今ここに掲げた一文が持つ意味を考えること、すなわち父ミカエル・P・キエルケゴールが子セーレン・キエルケゴールに及ぼした影響を考えることは、キエルケゴールの著作活動の姿勢を読み解く上で重要な役割を果たすであらう。キエルケゴールに人生の方向性や研究の対象を決定づけたのは父であり、そしてその父が敬虔主義的キリスト教精神をもつ人物だったことは既によく知られるところである。

キエルケゴールの父の敬虔主義的信仰心は貧農の子であつた幼少時からのものであり、コペンハーゲンにおいて商業的に成功した後にも、敬虔主義の一派であるヘルンフートの同胞教会を訪れていた²。この父によつて少年時から厳格に教育されたキエルケゴールはまさに「ヘルンフート³の敬虔の雰囲気の中で成長」⁴したのである。また、キエルケゴールの蔵書目録⁵には、敬虔主義の始祖と目されるシユペーナー (Philip Jakob Spener, 1635-1705) をはじめとして、ヨハン・アルント、テルステーゲンなどの敬虔主義者の著作が含まれていることを見てとることが出来る。

しかし著作活動において、キェルケゴールが敬虔主義という語を使うことはほとんど無かった。Haug氏の指摘に拠れば、公刊された全著作中に二度しか使われていないのである。その上、その2度の使用において敬虔主義が示すところの意味は、敬虔主義を肯定するもの⁷と否定するもの⁸との二極に分化しているのである。この分化はまさに敬虔主義自体が辿った体質変化の過程を如実にあらわすものである。

父の影響や当時の教会の状況、教育体制、蔵書などを併せて考えるとキェルケゴールが敬虔主義に通じていたことは疑いのないところであるが、言及する頻度が少ないことを勘案すると、敬虔主義に対するキェルケゴールの態度は複雑なものであると考えられる。

ここで敬虔主義の出自がそもそもいかなるものであるかということ明らかにするために、シュペーナーの『敬虔なる願望』の眼目を検討する。

2. シュペーナーに見る敬虔主義の原型

シュペーナーの一六七五年の著書であり、その後の敬虔主義の綱領をなしていると言える『敬虔なる願望 *Desideria*』から、まずシュペーナーの信仰および教会に対す

る見解を読み取る。著書の表題にも掲げられている「敬虔なる願望」とは、「真実の福音主義教会の真意になつた改善」への願望である。シュペーナーは現状の批判として、教会に関わる人間を、世俗における権力者、聖職者、そして平信徒という分類を行った上で、それぞれに批判を加える。まず、「世俗的権力における欠陥⁹」としての政治的利害心を挙げ、また「聖職者の欠陥¹⁰」として、「自分たちの牧師においてみるものが、すでに真のキリスト教であり、それ以上は何も考えるに及ばない」という過度の依存の傾向が信徒に見られる故、聖職者制度の欠陥を指摘する。これは信仰における聖職者の仲介者的役割を否定するものである。そして「第三身分」、つまり前二者が統率すべきであるような一般信徒は、まず飲酒・酩酊の罪を通常有するものであるが、また訴訟に起因する貪欲、ねたみなども欠陥とみなされている。財産を私有事から来る施しの不徹底も欠陥として指摘される。つまり、シュペーナーはキリスト者のあるべき姿として禁欲の意味合いを強調するのである。さらに注目すべきは信仰行為の単なる外面的遂行への批判である。ただ洗礼を受け、神の言葉を説教で聞き、悔い改めをし、罪の赦しを受け、聖餐に列することがキリスト教

であり、「それだけで充分に礼拝を行っているのだと思いいんでいるものが多い」¹¹のが現状であるというシュペーナーのこの指摘は、いつの時代にも適用できるような、形式的な宗教形態への的確な批判であると読みとることが出来る。

以上の指摘をした上で、シュペーナーは現状を改善するために、テルトウリアヌスなどを引用しながら、初代教会で行われていたような敬虔な生活を復活させる提言をする。具体的な提案として、聖書を読むことを勧める。聖書を僧職者の独占とせずに、キリスト者とならんとする者が積極的に触れるように勧めるのはルター以来のことであるが、シュペーナーはさらに徹底して、信徒が聖書に関する研究会のような集会を持つことを奨励する。そしてすべてのキリスト者が、全ての他のキリスト者に対して、彼らの救いのために配慮する責務がある¹²とする。「神学は実践的態度であって、単なる知識の学問には存しないというまさにその理由によって、単なる研究では足りず、他方単なる蓄積や伝達でも充分ではない」¹³。敬虔主義の信仰はそのすべてが生きた活動にかかっており、実践を重要視する敬虔主義は、教育機関の創設や、貧者救済などの社会問題にも積極的に関わり諸々の貢献をする。そして「少数の学識者よりも、会衆の大多数を占めている

る素朴な人々を目当てにしていなくてはならない」¹⁴として、説教の必要性を説く。説教の必要性和理解が容易であることは、聖書の勧めと同様に、キリスト教に個人個人が直接に触れる機会を広げているのである。このように、敬虔な人間はそれまでには考えられなかった仕方、自分自身と向かい合うことを要求されるようになったのである。

3. キエルケゴールにおける教会批判と本来の信仰

シュペーナーの著作からその敬虔主義の特質をみたところで、次にキエルケゴールの教会批判と信仰への姿勢を明らかにする。

キエルケゴールのアンチ・クリマクス名義での著書『キリスト教の修煉 *Indøvelse i Christendom*』(1850)は、キエルケゴール自身がその冒頭にも書いているとおり、「覚醒と内面化のため」¹⁵の書であり、ここで覚醒すべきとされているのは、キリスト教世界全体である。「キリスト教世界にあるものは、キリスト教のもつ輝かしい無上の諸真理について、：日曜日ごとに果てしなく繰り返されるおしゃべりである」¹⁶という句は、ノルマと化した教会機構にあからさまに向けられた言葉であると読みとれる。当時の状況に目を向けて

みると、18世紀の終わりから19世紀の初頭ごろまでには既に形骸化してはいたが、国教会のもとにある全てのデンマーク人には祝祭日に教会に赴くことが義務づけられていた。キリスト教はデンマークという国に一つの社会的制度として在ったのである。キリスト教が国によって保護され、国民全てがキリスト教徒である、という状態は、一般的には完全なるキリスト教界であると考えられてもおかしくない。しかし実際はそうではなく、このキリスト教界と

考えられているのは実は欺瞞に満ちたものであり、いわば巨大な錯覚である、とキエルケゴールは糾弾するのである。

「キリスト教世界は、自分ではそれと知らずに、キリスト教を抹殺してしまった。それゆえ、いま為さるべき必要事は、キリスト教世界にキリスト教を再導入しようとする努力なのである」¹⁸。キリスト教世界にキリスト教を導入するという、この一見無意味な行為のような表現で表されるところのものが、実は彼の著作活動の内容、及び姿勢をよくあらわしていると考えられる。「キリスト教世界にいつも繰り返して現れてくるこの衝突は、手短に名づければ、既存の秩序に対する敬虔主義的衝突 (Pietisms Collision med det Bestaende) とある」¹⁹。既存の、制度化したキリスト教世

界に真のキリスト教は無いという根本的認識に立つキエルケゴールは、敬虔主義という信仰の覚醒の運動をもとにして、国教会制度に挑んでいくのである。

さらに、キエルケゴールにとつてのキリスト教の本質は、当時の思想界の趨勢とは全く異質のものであった。『キリスト教の修練』の第三部では、「かれは高きところからすべての人をみもとにひきよせたもう」という、ヨハネ福音書12章32節に応じた表現が繰り返し使われ、本文の叙述の基調をなしているが、これはただ次のことを強調せんがためのことであると理解される。すなわち、悟性の働きなどによる信仰ではなく、イエスが信する者をすくい取るという信仰である。キリスト教に関するキエルケゴールの基本的な姿勢は、キリスト教に対する知的理解の拒絶である。「ひとりの人間が神であるというのがキリスト教である」²⁰という逆説を中心に抱え、またその逆説なしに成立しないのがキリスト教である。キエルケゴールが信仰の悟性に対する優位性、ひいては信仰の悟性への対立を主張するのはまさにこのキリスト教の性質に起因するものである。「自分自身が(単独者として)罪人であるというこのへりくだった自覚がかけられている場合には、しかし、ほかにどんなものもろもろも人間の英知と常識とを

もち、加えてどんな人間の才能に恵まれていようとも、それらはほとんど何の益にもならないであろう」²¹。イエスという神であり人間 (Gud-Menneske)、つまり永遠にして時間内の存在というのは、逆説であり、人間の悟性にその限界を示し、信仰のみを要求するものである。ここで「蹟く」か「信ずる」かはキリスト教信仰の要にあたる問題であり、ここに人間のすべての関心は集中しなければならない。キエルケゴールにとつてのキリスト教の本質がこのようなものである以上、もしわれわれがキリスト教とはなにかということを理解したいなら、われわれに出来ることは、「信仰は理解され得ないということを理解すること」²²だけなのである。

以上でシュペーナーに敬虔主義の範を取り、またキエルケゴールのキリスト教理解を見たのであるが、そこから次のような論点の抽出を為すことが出来るよう。

4. 両者のキリスト教への関係とキエルケゴールの敬虔主義観

シュペーナーの敬虔主義におけるキリスト教改革の眼目は次の二点に置かれている。

- ① 個人による信仰の再認識
- ② 信仰に基づく生活の実践

キエルケゴールのキリスト教批判の二つの要点は以下の通りである。

- ① 理性的な信仰への批判
- ② 国教会制度の批判

ここで両者の主張をそれぞれ二つずつに大きく分類したが、そのうち①はキエルケゴールとシュペーナー両者に共通する事柄である。つまり、信仰の内面性を重視するという点では両者は一致していると言ってよい。「実際のところ、敬虔主義（正しく理解されるなら、単にダンスなどの外面的なことを慎むという意味ではなく、真理の証人となりそのために苦をするという意味であり、それと同時にこの世での苦しみはキリスト者となることに帰属するものであり、抜け目なく世俗的にこの世と調和することは非キリスト教的である、ということを理解するという意味で）、そう、実際、敬虔主義こそキリスト教の唯一無二の帰結なのである」²³。

しかしシュペーナーの②が、敬虔主義が経年変化をした後

に、キエルケゴールの批判の対象となるのである。つまり、ここにあげたシュペーナーのキリスト教改革の眼目は、そのままキエルケゴールの敬虔主義の二重の評価になっていると考えられるのである。キエルケゴールが肯定的に評価した敬虔主義とは、キリスト教界という巨大な錯覚、つまり宗教改革の意味が次第に薄れ習慣的な欺瞞に堕していたキリスト教を内部から批判し、理論的な神学に支配された教会を、宗教改革者たちが本来的に求めていた内面性の信仰の場所に変革することを訴え、個人個人が真のキリスト者へとなるべきであることを説くものである。そしてキエルケゴールの否定的な評価は、単なる「厳正さへと、つまり禁則と人生の規則の集成へと堕していた」²⁴敬虔主義へと向けられた。敬虔主義において、信仰は社会生活においても体现されるべきだと唱え、慈善事業と伝道という二大課題をシュペーナーは掲げたのであるが、このような姿勢は、時代が下り、啓蒙主義を経た後では保守的な道徳と同等視されるようになったのである。「私は今までこれっぽっちも問題を敬虔主義へと、敬虔主義の厳正さやその類のものへと拵げようと提案したり試みたりしたことはない。…私が本当に欲するもの、それは我々の語りにおける、そして何にもまして我々の説教における真

理である」²⁵。この言葉からもわかるように、敬虔主義という言葉でキエルケゴールが意図しているのは、あくまでも①、すなわち内面の敬虔さに関わるものであり、②が本質的に有する単なる道徳規範への転落の可能性はキエルケゴールにとつては最も退けるべきものである。また、シュペーナーの②を否定することは、キエルケゴールにおける②を強く指摘することにもなる。キエルケゴールにとつて、デンマークの国教会の内面的信仰を失った制度²⁶は、キリスト教とは既にまったくかけ離れたものに見えた。著作のなかで幾度となく繰り返される「キリスト教会にキリスト教を導入する」というキエルケゴールの姿勢は、一般的にはキリスト教国として成立しているデンマークにおいて、非キリスト教化への警鐘である。国家はあたかも水道や道路のように、信仰も国民に対して満たさなければならないような手軽な必需品と考えている、とキエルケゴールは批判する。「手軽さにけちをつけるつもりは全くない。だが、それは、それにふさわしい場所だけで通用させればよいのである」²⁷。

結び

キエルケゴールと敬虔主義の関係を、序で述べたような思

想的背景を手がかりに考察してきた。シュペーターとキェルケゴールの主張は、ともに既存の教会の欺瞞を暴き、その改革を促すものであるが、改革を促す仕方は両者の間で差異が認められる。特に本稿第四節で見たように、改革の意図が飽くまで内面性に向いたものか、それとも敬虔な生活を重んじる余り外面的な単なる道徳規範への転落を孕むものか、という相違点がある。しかし、それでも厳然として両者の思想に通底するものは、既存の教会制度への疑念であり、信仰への自らの気づきを唯一無二のものと考えることである。「あらゆる敬虔主義者の根本テーマは、新しい人間、新しい人類、人間変革によるまったく世界変革」²⁸であると考えるとき、教会の新しい宗教改革を促す両者の運動は、信仰の根元への立ち返りという点で通底していると言えよう。「敬虔主義を取り入れるような真似はしていない。倫理的な人間や真理の証人になり、真理のために労を厭わず、俗世の狡猾さを認めないような方向を教唆すること、これが私のやりたいことである」²⁹という日誌記述に、本論で見てきたキェルケゴールの敬虔主義への関係が端的に現れている。

このように、キェルケゴールは、信仰を深化させるための内面性への志向という点で敬虔主義に賛同する反面、国

教会における単なる道徳・形式重視の風潮の原因を敬虔主義に帰した。キェルケゴールにとって敬虔主義は右のような両義性を持つものであり、そしてそれは当時のキリスト教界の全くの鏡像でもある。キェルケゴールはこの両義性を的確に見抜いていたが故に、敬虔主義的環境の最深部に居ながらも、教会の欺瞞を忌憚なく指摘することが出来たと考えられる。

註

- 1 S.V., X, 288
- 2 Marie M. Thulstrup, *Kierkegaard og Plettsmen*, Munksgaards Forlag, København, 1967, s. 13
- 3 ヘルンフォート (Hernhut)。ボヘミア地方を中心として成立した反カトリックのフス党の団体。のちにツィンツェンドルフ伯の庇護のもとに敬虔主義の一派として新しく組織し直された。
- 4 M. シュミット『ドイツ敬虔主義』小林謙一訳、教文館、一九九二、一八四頁
- 5 Katalog over Søren Kierkegaards Bibliotek, udgivet af Søren Kierkegaard Selskabet, med Indledning ved Niels Thulstrup, 1957 (『キェルケゴール蔵書目録』大谷長解説、『キェルケゴール研究』二、三、四号所収、一九六五—六七)
- 6 Søren Kierkegaard's Journals and Papers, vol.3, p. 868
- 7 S.V., XVI, 89
- 8 S.V., XVIII, 74

- 9 Spener, *Pia Desideria*, translated by Theodore G. Tappert, Fortress Press, 1964, p. 43
- 10 *ibid.*, p. 44 ff.
- 11 *ibid.*, p. 65
- 12 *ibid.*, p. 94
- 13 *ibid.*, p. 112
- 14 *ibid.*, p. 116
- 15 S. V., XVI, 11
- 16 S. V., XVI, 44
- 17 Kirmmse, Bruce H., *Kierkegaard in Golden Age of Denmark*, Indiana U.P., 1990, p. 27 ff.
- 18 S. V., XVI, 45
- 19 S. V., XVI, 89
- 20 S. V., XVI, 85
- 21 S. V., XVI, 74
- 22 *Pap.*, XI A561
- 23 *Pap.*, X3A437
- 24 Thulstrup, *op. cit.*, s. 46
- 25 *Pap.*, X3A519
- 26 クリスチャン6世の下、国教会の護持のため、私的宗教集會を禁止したり、安息日条例を制定して日曜の祈りを法制化した。T.K.Derry, *A History of Scandinavia*, Univ. of Minnesota Press, 1979, p. 175
- 27 橋本淳編『ナンブークの歴史』創元社、一九九九年一〇頁参照
- 28 S. V., XIX, 110
- 29 M.ニッソン『ドイツ敬虔主義』小林謙一訳、教文館、一九九二年一七七頁
- 92 *Pap.*, X3A556
- S. V., XIV, 数字、アラビア数字の順で略記するのは、Søren Kierkegaard, *Samlede Værker*, udg. af A.B. Drachmann, J.L. Heiberg og H.O. Lange, 3. Udg. の巻二頁を参照。
- Pap.*, XIV, 数字、アラビア数字の組み合わせで略記するのは、Kierkegaard, *Søren Kierkegaard's Journals and Papers*, edit. and transl. by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Indiana U.P., 7 vols., 1967-78 の巻二を参照。
- 参考文献
佐藤敏夫編『キリスト教教育宝典Ⅴ シュペナー・トレルチ・ブルンナー他』玉川大学出版部、一九六九年
Kierkegaard, *Die Tagebücher*, ausgewählt, neugeordnet, und übersezt von Hayo Gerdes, 5 Bde., Eugen Diederichs Vlg., 1962-74
キェルケゴールと敬虔主義の關係について、以下の二書を特に参考にした。
中里巧『キェルケゴールとその思想風土』創文社、一九九四年
Marie M. Thulstrup, *Kierkegaard og Pletismen*, Munksgaards Forlag, København, 1967
(ベジェタ・リン 大谷大学大学院博士課程 哲学)